

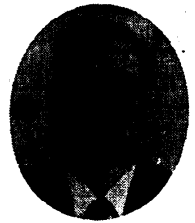
巻頭言



国際会議に想う

—本学会と国際会議との係り合い—

田 中 幸 吉†



昨年9月末から10月上旬にかけて本学会員と係りの深い国際会議が大小合わせて5つ開催された(内1つは京都)。東京で開催された4つの会議には何らかの意味で総てに係り合つて会議の様子をこの目で見てきた。それらを通じて私の抱いている印象・感想と私の今までに体験(自ら組織したり,あるいは実行委員として参画したり,または参加)してきた国内外の大小さまざまな国際会議における印象・経験とを比較しながら,これからの国際会議開催と本学会との係り合いについて考察してみたい。

IFIP Congress 80はMEDINFO 80と並んで大変盛會裡に終り,大成功おめでとうございました。しかしながら色々の観点から反省して問題点がなかったとは言ひ切れないように思う。例えば(私の専攻している分野に限って申ししても)内容的に不満足な点もなかった訳ではない[IFIP中のある北欧からの招待論文等(その他にもあったが,専攻分野以外の事は控える)はものたりなかった!]

それに引き替えCOLINGとWC on Man-machine Communication in CAD/CAMは(IFIPとは勿論性格を異にするが)学問的な意味で大成功衷心よりおめでとうと申し上げたい。これから分ることは,国際会議は概してトピックスを絞り比較的少人数の参加者で,専門学者の手によって適度の規模で開かれるものが本質的な意味において成功するのではないかと申し上げたい。また新聞との対応においてもCOLINGがMainichi Daily News(Sept. 30, 1980)の第4頁全面に亘り極めて詳細に学問的な解説記事を載せたことは,国際会議として(国際会議だから英文でよい)大変よい企画と思われた(そもそもこの種の会議は社会部記者には馴染まない筈。専門の記者または実行委員自ら執筆の方がよい)。

まだまだ批判したい事は山ほどあるが紙面の都合上その他を勘案し,既に終わった会議をあげつらう事はこれ位にして将来のため国際会議と本学会との係り合い

について,これまたずばり提案して会員各位のご叱正・ご批判を仰ぎたい。

(1) 本学会は創立20年を経,会員数1万数千名に及ぶ大学に発展した現在においては(創立当初の経緯は神話に棚上げし)*,一個の確立されたディシプリン(Information & Computer Sciences and Technologies)**を代表する唯一の(純粋な)学会としての諸活動に,より一層の努力をしてゆくべき節目に来たように思われる。私のように学界にいる者は「本学会は純粋学会として学界から認知されているのだろうか?」という疑問を孕んだ事態に(例示する紙面がないので省くが)時々遭遇する。

(2) IFIPも含めあらゆる国際会議はその開催に当り,本学会と財政的にも事務的にも完全に独立した組織として運営されるべきであろう(勿論本学会員がその組織に参画するのは当然の成り行きであろう)。IFIPはその国際活動の窓口(IFIP国内委員会等)をURSI, IFACのように日本学術会議の中に設ける方がよいのではなかろうかと思う(敢て上記のように神話を否定する)。ここではIFIPの性格からみてURSIに見習うべき点があることを申し上げておきたい***。

拙筆に当り(上記のように感傷主義をこえた急進的な提言を敢てしましたが,それとは異なる次元から)IFIP開催に向けて3年以上も前からご尽力された実行計画委員会・実行委員会各位ならびにIFIPと共に本学会を育ててこられた先輩各位のご努力に衷心より敬意を表します。

* これに関連して近く本学会内に「学会の歴史に関する研究委員会」が設けられる気運にあることは大変時宜を得た結構なことと思われる。

** 田中幸吉:情報処理に関する学問体系,情報処理,Vol. 21, No. 5(May 1980)。

*** URSIの総会(Plenary Assembly)も,いわゆる conventionalな国際学会ではない。私はワルシャワで開催された第17回URSI総会(1972)の第6分科会における分科会長指名Introductory Speaker(URSIにはこれ以外の個人発表はない)として参加。地味で真摯な会議という印象がある。なお日本での開催は1963年(東京)が初めてであった。

† 本会副会長 大阪大学基礎工学部情報工学科

(昭和55年10月29日)